

## 李白「梁甫吟」考(上)

——樂府梁甫吟の系譜への位置付け——

松 原 朗

李白は、傳統樂府の優れた作り手である。短篇では「靜夜思」「採蓮曲」「玉階怨」「清平調詞三首」、長篇では「蜀道難」「戰城南」「將進酒」「行路難三首」等、そのいずれもが李白を語るに不可缺の、彼の代表的な作品となっている。そしてここに取り上げる「梁甫吟」も、そうした彼の樂府作品の一つなのである。

ところで「梁甫吟」といえば、本稿で取り上げる李白の「梁甫吟」以外にも、例えば李攀龍『唐詩選』や『唐詩三百首』にも選ばれた杜甫の七律「登高」の尾聯に、

可憐後主還祠廟 憐れむべし 後主も還お廟に祠らる  
日暮聊爲梁甫吟 日暮 聊か爲す梁甫吟

とその名が現れていて、頗る知られた樂府題となっている。またそれ故に、「梁甫吟」は、數ある樂府題の中でも比較的有力なものの一つと考えられやすい。しかしながら郭茂倩『樂府詩集』四一「相和歌辭」に收められる「梁甫吟」の條を見ると、諸葛亮以下、陸機、沈約、陸瓊、そして唐代では僅かに李白の歌辭を載せるに留まっている。つまり今日ではよく知られている梁甫吟も、樂府題一般の中では決して多くの歌辭を擁する有力な存在ではなかったことが、理解されるのである。

本稿では、李白の「梁甫吟」を二つの角度から考察することにした。まず、李白に先立つ魏晉南北朝における「梁甫吟」の形成と繼承の過程の考察となる。傳統樂府は、古辭あるいは先行する擬古歌辭の意識的繼承を前提として成り立

つ文學様式である。とすれば、李白が繼承の對象としたところの魏晉南北朝期の梁甫吟に對する考察は、本稿に不可缺の部分となるだろう。

第二に、李白の「梁甫吟」が、先行作品に對して新たに何を付加したのかを選び分けなければならない。唐代の傳存する梁甫吟歌辭が、李白のひととき優れたこの一篇だけに限られると言う事實は、彼が梁甫吟という舞臺の上で成し遂げた跳躍が、他の追隨を許さぬ程に大きく、また特異なものであったことを示唆するものであろう。

この「梁甫吟」は、李白詩中の代表的な名篇であり、また樂府「梁甫吟」中の代表的名篇と目されながら、しかしそれでいて、その作品は歴代の梁甫吟歌辭の系譜にひとときわ特異な一角を占めている。とすれば、李白の「梁甫吟」の考察は、ただ單にこの一篇の作品の考察に終るものではなく、李白の文學一般が放つ特異な個性を理解するための有力な手掛りともなりうるものである。

## (一)

傳統樂府「梁甫吟」が、どのような經緯を辿って形成されてきたのか。またその結果として李白の直前における梁甫吟

李白「梁甫吟」考(上)(松原)

が、總體として、如何なる主題の傾向性を持つ作品群であったのか。しかし今ただちにこの問題の考察に入る前に、あらかじめ今日の「梁甫吟」に對する、一般的な——それは多分に李白の梁甫吟を中心に形成されてきた——理解が何であるのかを確認することが必要であろう。すなわちこれとの對比によって、李白に先立つ梁甫吟の總體的特徴を、一層鮮明に浮き上がらせることができるためである。

今日の一般的な——つまり必ずしも嚴密に「學問的」であることを要しない——梁甫吟の理解とは、おそらく次の様なものであろう。

。梁甫吟——諸葛孔明がまだ世に出ぬとき愛誦したといわれる歌。樂府、相和歌辭の楚調曲の一つに梁甫吟というものがあり、田開疆・古冶子・公孫接の三勇士が宰相の晏嬰におとしいられたことを嘆いた詩である(目加田誠『唐詩選』明治書院、新釋漢文大系、杜甫「登樓」詩の語釋)。

。《梁甫吟》是諸葛亮遇劉備前喜歡誦讀的樂府詩篇、用來比喻這首《登樓》、含有對諸葛武侯的仰慕之意(『唐詩鑑賞辭典』上海辭書出版社、杜甫「登樓」詩の注釋。項目

## 中國詩文論叢 第十六集

執筆：趙慶培。

。《梁甫吟》是古代用作葬歌的一支民間曲調、音調悲切凄苦。古辭今已不傳，宋郭茂倩《樂府詩集》收有諸葛所作一首、寫春秋時齊相晏子「二桃殺三士」事、通過對死者之傷悼、譴責讒言害賢的陰謀。李白這首也有「力排南山三壯士，齊相殺之費二桃」之句、顯然是襲用了諸葛亮那首的立意（同右。李白「梁甫吟」詩的注釋。項目執筆：范民聲）。

右は、日中において比較的通行性の高い注釋書から、杜甫「登樓」詩、李白「梁甫吟」詩の注釋中の樂府「梁甫吟」に對する語釋を引用したものである。

これらの中から共通項を整理すると、左のようになるであらう。

- ① 諸葛亮は、劉備によって見出だされる不遇の遁世期に、「梁甫吟」を愛誦していた。
- ② 諸葛亮愛誦の「梁甫吟」歌辭は、齊相晏嬰によって、田開疆・古冶子・公孫援が謀殺された、という内容のものであった。

③ 李白も杜甫も、右①②の理解を踏まえて、みずからの「梁甫吟」を作り、あるいはそれに言及する詩篇を作った。

これを概して言えば、李杜より以來、今日に至るまで、「梁甫吟」は諸葛亮との特別な關係のゆえに想起される樂府題だったと言ふことになる。そこで次に問われるのは、樂府「梁甫吟」と諸葛亮とのその特別な關係は、如何にして説話化され、流布されることになったのかという問題である。以下、この「諸葛亮好爲梁甫吟」説話の由來について、必要な分析を行うことにしたい。そしてその説話とは、右の整理項目によれば、①、②の二つ要素から成るものである。

## (二)

「諸葛亮好爲梁甫吟」説話は、あらかじめ見通しを立てて言うならば、當初から①、②の要素を併せた完成態を持つものではなかった。その両者が結合して影響力のある説話として完成されるのは、おそらく南北朝時代の末期ないしは唐初にまで下るものと判斷されるのである。

樂府「梁甫吟」について、初めてまとまった解題を與え、

またそれが今日に至るまで標準的な認識となっているのは、南宋・郭茂倩『樂府詩集』のものである。『樂府詩集』は、まず「梁甫吟。蜀・諸葛亮」と標記し、次に樂府題の解題を記し、さらにその後に「步出齊城門、云々」(後掲)の歌辭を載せている。そこで解題中の樂府題の由來を説明する部分を引用書ごとに逐條すると、左のようになる。(郭茂倩は『古今樂錄』を引用する中で①⑥を記す。従って③の按語は、『古今樂錄』のものである。)

- ① 謝希逸『琴論』曰：諸葛亮作「梁甫吟」。  
 ② 『陳武別傳』曰：武常騎驢牧羊。諸家牧豎十數人、或有知歌謠者。武遂學「泰山梁甫吟」「幽州馬客吟」及「行路難」之屬。<sup>(1)</sup>  
 ③ 『蜀志』曰：諸葛亮好爲「梁甫吟」。——然則不起於亮矣。

- ④ 李勉『琴說』曰：「梁甫吟」、曾子撰。  
 ⑤ 『琴操』曰：曾子耕泰山之下、天雨雪凍、旬月不得歸、思其父母、作「梁山歌」。<sup>(2)</sup>  
 ⑥ 蔡邕『琴頌』曰：梁甫悲吟、周公越裳。<sup>(3)</sup>  
 ⑦ 按：梁甫、山名、在泰山山下。「梁甫吟」、蓋言人死葬此

李白「梁甫吟」考(上)(松原)

山、亦葬歌也。又有「泰山梁甫吟」、與此頗同。

郭茂倩は樂府題「梁甫吟」の由來について、自説を述べるに先立って六書を掲げて諸説を併記しているが、今さらにそれを整理すれば、左のようになるだろう。

- ① 諸葛亮の創設した樂府題とする説。①謝希逸『琴論』。  
 ② 諸葛亮の愛誦によって有名になった樂府題とする説。  
 ③ 『三國志・蜀志』。  
 ④ 曾子の創設した樂府題とする説。④李勉『琴說』、及び⑤(傳蔡邕)『琴操』。

郭茂倩は、先行諸説を三つに整理した上で、改めて、そのいずれとも異なる自説(⑦)を提示する。すなわち、泰山の下にある梁甫山は、埋葬の山であり、「梁甫吟」とはこれに因む葬歌である。こう述べる郭茂倩の解釋は、③説とは矛盾しないが、①、②を全く否定するものとなっている\*。

\* ちなみに後漢より魏晉にかけて「薤露」「蒿里」等の葬歌(挽歌)の類が、葬禮の場を離れて廣く宴飲歡娛の場で愛誦されたことについては、蕭滌非『漢魏六朝樂府文學史』(人民文

## 中國詩文論叢 第十六集

學出版社、一九八四年）の六三頁・一一一頁に言及がある。また同時に蕭滌非は、郭茂倩を支持して、梁甫吟とはかかる葬歌の一種であつたと認定している。一方、この「梁甫吟葬歌説」に對しては異論もあり、古典的なものでは清・朱乾（柘堂）の『樂府正義』（卷九「泰山吟」の解題）を擧げることが出来る。——しかし梁甫吟がそもそも葬歌であつたか否かの議論は本稿の論旨とは離れるので、これ以上ふれない。

要するに郭茂倩の認識するところによれば、——梁甫山は埋葬の山であり、樂府「梁甫吟」はこれに因む葬歌である。古辭は存せず、現存する最古の歌辭は、蜀・諸葛亮の制作した「步出齊城門云々」である——と言うことになるう。

樂府題「梁甫吟」を、諸葛亮個人の創題とみる説を否定したことは、樂府は一般に民間歌謠に由來するという今日の文學史的理理解と一致するもので、首肯されてよからう。しかし現存する最古の歌辭「步出齊城門、云々」をただちに諸葛亮の制作歌辭とみる郭茂倩の説には、なお一考の餘地があるだらう。<sup>(5)</sup>

## (三)

次に、郭茂倩が諸葛亮の作と考える、現存する最古の歌辭<sup>(6)</sup>を読むことにしたい。

## 梁甫吟

步出齊城門

歩みて齊城の門を出で

遙望蕩陰里

遙かに蕩陰の里を望む

里中有三墓

里中に三墓有り

累累正相似

累累として正に相似たり

問是誰家墓

問う 是れ誰が家の墓ぞ

田疆古冶子

田疆・古冶子なり

力能排南山

力能く南山を排し

文能絕地紀

文能く地紀を絶ちしも

一朝被讒言

一朝 讒言を被りて

二桃殺三士

二桃 三士を殺せり

誰能爲此謀

誰か能く此の謀を爲せる

國相齊晏子

國相 齊の晏子なり

(大意) 齊城(臨淄)の城門を出ると、遠くに蕩陰の村里が見える。里中には三つの墳墓があり、重なり合つてどれも形がよく似ている。一體誰の墓なのかと尋ねると、それは田開

疆・古冶子・(それに公孫接)のものだと言う。思えば彼等は、その非凡な膂力で南山を押し除け、智力は地軸をも絶ち

切る程であつたのに、一朝思い掛けずも讒言を被つて、かくして二つの桃が、三人の士を殺すこととはなつた。誰がこの陰謀を企んだかと言へば、それは齊國の宰相たる晏嬰その人である。

この歌辭の背景には、よく知られた『晏子春秋』『内篇諫下第二』に載せる故事がある。

公孫接・田開疆・古冶子の三士が、齊の景公に仕えていた。しかし彼等は、みずからの功を恃んで、不遜の振舞いが目についた。そこで宰相晏嬰が、彼等を除くようにと進言した。景公は、三士の屈強なることを思い、殺害の計の成らざるを心配した。晏子は續けて言う。「彼等はなるほど屈強ではありませんが、長幼の禮を辨えません」。こうしてあえて桃を二箇だけ贈つて、彼等がみずから功を計つて食べるようにと申し付けた。公孫接は、これが晏嬰の計畧であることを見抜いたが、それを恐れて桃を受け取らないのは勇なき徴とされるのを嫌い、あえて自分の功を誇つて一箇の桃を取つた。田開疆も、これに續いた。古冶子が、最後になつた。しかし、景公の左驂（乗車を挽く左側の馬）を呑んだ龍を追つて水中に格闘し、ついにこれを打ち殺したときの功を古冶子

李白「梁甫吟」考(上) (松原)

が述べるに至つて、公孫接と田開疆は己の功の決してこれに及ばないことを恥じると、桃を返し、みずから頸をはねて死んだ。これを見た古冶子は、ひとり生きながらえることを恥じて、これもまた桃を返し、みずから頸をはねて死んだ。晏子は、事の最後を見届けると、三人を士の禮を以て厚く葬つたのである。――

ところで諸葛亮と樂府「梁甫吟」との關わりを初めて記しているのは、陳壽『三國志』蜀志「諸葛亮傳」である。

(從父諸葛) 玄卒。亮躬耕隴畝、好爲「梁父吟」。

ここに明記されているのは、――早く孤となつた諸葛亮がひとり頼みとしていた從父諸葛玄の卒した後、彼はやむなく隴畝に躬耕して野に埋もれ、その時分、好んで「梁父吟」を爲した――という「事實」だけである。それゆえここで確認を要するのは、諸葛亮が如何なる梁甫吟の歌辭を「爲」したのかは明記されていない、というもう一つの「事實」の伏在であろう。すなわち前述した「諸葛亮好爲梁甫吟」說話を構成する二要素に即して言へば、要素②の完全な欽落である。

では『三國志』『諸葛亮傳』に備わらない説話の②の要素（諸葛亮が好んで爲した歌辭は「歩出齊城門」）が追加されるのはいつかとなると、確認される最も初期の記載でも、唐初の『藝文類聚』（成書六二四年）を待たなければならぬ。その卷一九「人部三・吟」に記す。

『蜀志』諸葛亮梁父吟曰、「歩出齊城門、云云」。

この記載には、少くとも三つの注目すべき點がこめられている。まず第一に、これは『三國志』『蜀志』とは稱しながら、實はその「諸葛亮傳」にはない記載であること。つまり現行『三國志』を基準にすれば、この『藝文類聚』の記載は明らかな『三國志』の改變なのである。第二に、現存する文獻資料に即する限りで、梁甫吟歌辭「歩出齊城門」は、これ以前には見えず、この『藝文類聚』において初出していること。そして第三に、「諸葛亮梁父吟」と記されることによつて、以下の「歩出齊城門」の歌辭が諸葛亮自身の制作歌辭と認定されていること。かりに、單に愛誦の歌辭であるという解釋の可能性も残したいならば、ここは例えば「諸葛亮所爲梁父吟」とすればよく、またもし端的に愛誦歌辭として明示

したいならば「諸葛亮所唱、（または吟・誦・歌）梁父吟」となるべきであらう。それゆえこの『藝文類聚』が歌辭「歩出齊城門」を諸葛亮の制作と見ていることは、ほぼ確かなところである。そして郭茂倩が『樂府詩集』にこの歌辭を載せて「梁甫吟。蜀・諸葛亮」と標題し、作者を諸葛亮と認定するのも、畢竟その源流を辿れば、この『藝文類聚』にまで行き着くのである。

『藝文類聚』による『三國志』『諸葛亮傳』の書き換えは、それがいかに小さな部分であっても梁甫吟の理解に本質的な變更をもたらした點で、重要な意味を持つものであった。というのも「諸葛亮好爲梁甫吟」説話は、ここを以て前述した二つの要素を具足し、その完成された説話は、その後の梁甫吟の享受と制作の方法を規定することになるからである。

しかもこの改變という「事件」は、これがもたらした結果の重要性とともに、一方では、これをもたらした原因の存在をも示唆している點で重要な意味を持つものでもある。『藝文類聚』は、高祖李淵の詔令を受けて歐陽詢等が編纂した類書である。こうした官撰の類書において、單純に粗忽に出た誤記の出現する蓋然性は、常識的判斷として、極めて低かったと考えるべきだろう。とすれば、この改變の背後には、そ

れを必要とする、ないしはそうであることを自然と見る認識が積極的に働いていたと見るのが適當なのである。

(四)

以上、西<sup>い</sup>晉<sup>しん</sup>の陳壽の『三國志』と、唐<sup>たう</sup>初の歐陽詢の『藝文類聚』との間に、「諸葛亮好爲梁甫吟」説話の重要な變更發展があつたことが確認された。ではこの間に位置する六朝期において、梁甫吟そのものの制作は如何なる経緯を辿つて展開していたのであろうか。

『樂府詩集』に載せるのは、西晉の陸機、梁の沈約、陳の陸瓊の作品である。このうち、まず陸機の「梁甫吟」から考察を加えることにしたい。

梁甫吟

玉衡既已驂

西晉・陸機  
玉衡 既已<sup>すで</sup>に驂<sup>うまつ</sup>ぎ

羲和若飛凌

羲和(太陽)飛凌するが若し

四運尋環轉

四運(四時)尋<sup>めぐ</sup>で環<sup>めぐ</sup>り轉<sup>め</sup>じ

寒暑自相承

寒暑 自ら相承<sup>あひつ</sup>く

冉冉年時暮

冉冉として年時暮<sup>く</sup>れ

迢迢天路徵

迢迢として天路<sup>あまのち</sup>徵<sup>か</sup>なり

李白「梁甫吟」考(上)(松原)

招插東北指  
大火西南升  
悲風無絕響  
玄雲互相仍  
豐水憑川結  
霜露彌天凝  
年命時相逝  
慶雲鮮克乘  
履信多愆期  
思順焉足憑  
愴愴臨川響  
悲此孰爲興  
哀吟梁甫巔  
慷慨獨撫膺

招插(北斗の第七星)東北に指<sup>さ</sup>し  
大火(アンタレス)西南に升る  
悲風 響きを絶つ無く  
玄雲 互に相仍る  
豐水(山東省の河) 川に憑<sup>よ</sup>ちて結<sup>こ</sup>り  
霜露 天に彌<sup>み</sup>ちて凝<sup>こ</sup>る  
年命(壽命) 時(季節)とともに相逝<sup>ゆ</sup>き  
慶雲 克く乗<sup>の</sup>る鮮<sup>す</sup>し  
信を履<sup>ふ</sup>むも期<sup>き</sup>に愆<sup>いた</sup>うこと多く  
順ならんと思<sup>おも</sup>うも 焉<sup>たの</sup>ぞ憑<sup>よ</sup>むに足らん  
愴愴 川の響きに臨み  
此を悲しむこと孰の爲にか興さん  
哀吟す 梁甫の巔<sup>いただき</sup>  
慷慨して獨り膺<sup>むね</sup>を撫<sup>な</sup>づ

陸機の「梁甫吟」は、前半十二句が歲月の過ぎること速かにして、四時が移り變つてたちまちのうちに嚴冬が來臨することを述べ、後半八句は、これを承けて人生の短促なものと、しかもその短促なる人生が辛酸にのみ満たされていることを悲嘆する内容となっている。歲月の倏忽と、人生の短促



とを嘆くこの暗澹たる作品は、「古詩十九首」以來の漢魏の詩歌に通底して響く厭世的主調を西晉の時代に引き繼ぐものとなっている。しかも、その暗澹たる出口のない悲哀がとりわけ梁甫山の巔において極められる——哀吟梁甫巔、慷慨獨拊膺——というこの作品の特異な布置を見ると、郭茂倩の主張する「梁甫山＝埋葬の地」「梁甫吟＝葬歌」の解釋も、それなりの説得を持つもののように思われる。

ところでこの作品は、ひるがえって「諸葛亮好爲梁甫吟」説話を構成する二つの要素に照らしてみれば、すなわち、①不遇の遁世期に「梁甫吟」を愛誦したこと、②その「梁甫吟」歌辭は「步出齊城門」で始まる齊相晏嬰の三士謀殺を内容とするものであったこと、そのいずれの要素も含んでいないことを確認しなければならぬ。

陸機が「梁父吟」の制作に當たって、何故その諸葛亮説話を顧慮しなかったのか、可能性のあるいくつかの理由を考へることはできる。

まず考えられるのは、陸機が『三國志』『諸葛亮傳』を認知する機會がなかった可能性が高い。陳壽（二三三—二九七）が『三國志』の執筆にあつたのは、西晉による吳の平定（二八〇）を經過して以後のことである。一方、陸機（二六一—

三〇三）が入晉するのは、祖國吳の滅亡から約十年の後、武帝司馬炎の太康一〇年（二八九）頃と推定されている。しかも陸機は、入晉後、長命を保つことができなかった。舊時のように情報傳達が緩慢な社會にあつては、しかも甚だ短い時間の制約の中では、兩者が特別に親密な關係におかれてゐるのでもない限り、こうした同時性は却って陸機の『三國志』閱讀を難しくするものでしかなかっただろう。

また第二に、かりに閱讀の機會があつたと假定してみても、「諸葛亮傳」中の關連記事は「躬耕隴畝、好爲梁父吟」であるに過ぎず、第②の要素を缺いた、この未だ完全を成していない説話の斷片から、梁甫吟制作を促すに十分な靈感が得られる可能性は少なかったであらう。

しかも加えて、魏の禪讓を受けた晉においては、滅びたとは言えかつての敵國蜀漢の棟梁であつた丞相諸葛亮に關わる説話を進んで活用することには、なお多分に心理的抵抗もあつたであらう。しかも陸機は、吳の降服貴族の一人として入晉して、頗る微妙な立場に置かれていたはずなのである。

しかしこれ以上、臆測を重ねることに大きな意味はない。要するに理由が何であるにせよ、陸機の「梁甫吟」は、「諸葛亮好爲梁甫吟」説話とおよそ無關係の歌辭となっている。

そしてこの歌辭は、文人陸機の盛名とともに、結果としてその後には作られる樂府「梁甫吟」の一つの範型となった、この事實がここでは重要な意味を持つのである。現に以下に掲げる沈約の「梁甫吟」では、用字の次元から主題の設定に至るまで、例えば篇末が梁甫の山頂における悲嘆に極められるところまで、逐一指摘するまでもなく陸機の影響は明瞭なのである。

西晉より梁に至るまでの時期の傳存する梁甫吟歌辭は、陸機とこの沈約の二篇のみである。とはいへ當時作られた梁甫吟歌辭は、この二篇に止まるものではなかったに相違ない。

そして今は失われたそれらの歌辭も、おそらくは陸機より沈約に引き繼がれた梁甫吟の範型から遠く隔たるものではなかったと推測される。沈約は、齊梁という六朝文學の盛時を生きた代表的な文人であり、その沈約を文壇の重鎮と仰ぐ當時の一般情況の中にあつては、——しかも加えて、先行歌辭の自覺的繼承を前提とする傳統樂府の特性を考慮に入れるならば——これと全く異質な梁甫吟歌辭を志向することは、殆ど不可能だったと考えるのが自然な判斷なのである。

要するに、この時期には、「諸葛亮好爲梁甫吟」說話の影響が認められる梁甫吟歌辭は、現存作品に即して言えば皆無

李白「梁甫吟」考(上) (松原)

であり、また散失した作品までを想定しても、その影響が及んだ可能性は殆ど無かったと考えられるのである。そして臆測を一切混えずに唯だ確實なことだけを言うならば、西晉から梁に至るこの時期に、傳統樂府梁父吟の制作の場で、「諸葛亮好爲梁甫吟」說話は、なお決して主導的な役割を果たしていなかったということである。

#### 梁甫吟

龍駕有馳策

日御不停陰

星籥亟迴變

氣化坐盈侵

寒光稍眇眇

秋塞日沈沈

高窗灰餘火

傾河駕騰參

颼風折暮草

驚簾貫層林

時雲靄空遠

#### 梁・沈約

龍駕に馳策有り

日御 陰を停めず

星籥(星を運行させる鍵?)を亟しばしばば迴り變

じ

氣化 坐りて盈みに侵おかす

寒光 稍よちやく眇み眇

秋塞 日に沈かたむ沈

高窗 灰かたむきて火(アンタレス)を餘し

傾河 駕して參(星座名)に騰のぼる

颼風 暮草を折り

驚簾 層林を貫とおす

時雲 靄かげりて空しく遠く

## 中國詩文論叢 第十六集

淵水結清深 淵水 結りて清く深し  
 奔樞豈易紐 奔樞(時間の樞軸) 豈に紐び易からん  
 珠庭不可臨 珠庭(仙境) 臨む可からず  
 懷仁每多意 仁ならんと懷いて毎に意うこと多く  
 履順孰能禁 順を履まんとするも孰か能く禁えん  
 露清一唯促 露清くして一に唯だ促し  
 緩志且移心 志を緩め且つ心を移めん  
 哀歌歩梁甫 哀歌 梁甫に歩み  
 歎絶有遺音 歎絶して遺音有り

## (五)

しかし南北朝時代も後期になると、ここに微妙な變化の兆しが現れてくる。そして變化は、先行歌辭からの束縛の強い傳統樂府梁甫吟そのものの中にはなく、却つて自由な構思が許容される徒詩系の作品において先ず認められるようである。

例えば、次の任昉の作品を讀んでみよう。

落日泛舟東溪 梁・任昉  
 黝黝桑柘繁 黝黝(薄暗く) 桑柘繁り

芄芃麻麥盛 芃芃(鬱蒼) 麻麥盛んなり  
 交柯溪易陰 交柯 溪 陰り易く  
 反景澄餘映 反景 澄 映を餘す  
 吾生雖有待 吾が生 待る有りと雖も  
 樂天庶知命 天を樂しんで 庶は命を知らん  
 不學梁甫吟 學ばじ 梁甫吟  
 唯識滄浪詠 唯だ識る 滄浪の詠  
 田荒我有役 田荒るも我に役有り  
 秩滿餘謝病 秩滿つれば余 病に謝らん

任昉(四六〇—五〇八)は、すでに見た沈約(四四一—五一三)とともに、すでに南齊時期には竟陵王蕭子良の西邸に出入りして「竟陵八友」に數えられる文人であった。しかし彼は、沈約よりも十九歳わかく、文學活動においては明らかに後輩に屬する存在であった。『南史』五九「任昉傳」に記す。

既以文才見知、時人云「任筆沈詩」、昉聞、甚以爲病。晚節、轉好著詩、欲以傾沈(約)、用事過多、屬辭不得流便。

晩年になって詩に巧みになり、沈約を凌ごうとしたが、典故を多用したため、難澁な作風となった、とある。ところがいまここに沈約と任昉との前後を論ずるのは、前掲「落日泛舟東渚」詩が沈約以後の詩であることを個別事實に即して確定するためではない（没年だけを見れば、任昉が先に没している）。むしろ、任昉より以降、南北朝の後期に至って、「諸葛亮好爲梁甫吟」説話が次第に詩歌の領域に姿を現すという點で、沈約に對する任昉の歴史的位<sub>レ</sub>置を象徴的に提示したいと考えるためである。

ところで前掲の任昉詩を觀察しよう。前半四句は、舟遊びの叙景。末尾二句は、秩滿ちて官を辭し、故郷の園田に歸隱しようとする願望を述べる。その間に插まれた四句「吾生雖有待、樂天庶知命。不學梁甫吟、唯識滄浪詠」の中に、梁甫吟が現れている。——自分が生きるには、無くてはならぬ資料（衣食住、またこれを得るための官俸）があつて、それに不承不承拘束されているのだが、せめて樂天知命の心境にこそ至りたい。諸葛亮が梁甫吟を爲つたように不平を鳴らしたくはない。漁父が滄浪の詠をなしたその達觀こそ、慕わしい。——ここにおいて「滄浪詠」と對比された「梁甫吟」

が、〈不平の思いを懷いた不遇者の歌辭〉として性格付けられてゐることは、疑う餘地がない。そしてその「梁甫吟」は、陸機から沈約に繼承されたところの「人生の短促」という、一般者の普遍的悲哀を主題とする歌辭ではなく、特殊者の懷才不遇の慷慨を主題とする歌辭として認識されていることは、別して、注目される必要があるだろう。

任昉が探り當てたこの、もう一つの「梁甫吟」、それが『三國志』「諸葛亮傳」に記された「亮躬耕隴畝、好爲梁父吟」に由來することは、容易に推測される。しかも當の「諸葛亮傳」がこれに直ちに續けて「身長八尺、每自比管仲・樂毅、時人莫之許也」と記して、諸葛亮の「梁父吟」が、彼の他ならぬ懷才不遇を述べる文脈の中で言及されているという事實は、こうした推測を一層確かなものにするのである。

ところで「梁甫吟」の繼承と展開の中で、この任昉の詩を如何に位置付けることができるであらうか。

まず第一に、詩歌に限って見れば、諸葛亮との關係において「梁甫吟」が言及された、初出の作例となつてゐることである。ちなみに三國から隋に至るまでの現存詩歌において、詩題・詩中のいづれかに「梁甫（吟）」の名の見えるものを列記すれば、左のわずか七例に止まる。<sup>(1)</sup>

## 中國詩文論叢 第十六集

- ① 陸機「梁甫吟」(前掲)
- ② 陸機「太山吟」：梁甫亦有館、蒿里亦有亭。幽塗延萬鬼、神房集百靈。
- ③ 陸機「擬今日良宴會」：閑夜命懽友、置酒迎風館。齊僮梁甫吟、秦娥張女彈。哀音繞棟宇、遺響入雲漢。
- ④ 沈約「梁甫吟」(前掲)
- ⑤ 任昉「落日泛舟東溪」(前掲)
- ⑥ 陸瓊「梁甫吟」(後掲)
- ⑦ 庾信「臥疾窮愁」(後掲)

このうち①④には、諸葛亮と「梁甫吟」との関係は全く言及されておらず、これに對して任昉以下の⑤、⑥、⑦では、諸葛亮の名を明示する(⑥)か、明示しない(⑤、⑦)かに拘らず、兩者の關係を前提とした上で作られた作品となっている。魏晉南北朝を前後に二分するこうした分布の偏向は、個別作品ごとの單なる偶然を超えて、むしろ背後に不可逆的に進行する「諸葛亮好爲梁甫吟」説話の浸透を豫想させるものとなっている。そして任昉の詩は、あたかもその轉向點に位置していると見ることができるのである。

第二に、任昉詩は、確かに「諸葛亮好爲梁甫吟」説話を作詩の前提にしているのだが、しかし、説話の完成形態に照らすとき、説話の後半——すなわち諸葛亮による歌辭「步出齊城門」の愛吟という要素——の欽落に氣付くのである。しかもこの欽落は、任昉詩のみに限らず、その後の⑥陸瓊「梁甫吟」、⑦庾信「臥疾窮愁」にも同様に認めることができる點で、一層、無視しえない意味を持つことになる。つまり、任昉以下の魏晉南北朝の後期には、諸葛亮説話の浮上を一面の特徴としながらも、彼と梁甫吟歌辭「步出齊城門」との結合をまだ視野に納める段階に達してはなかった。兩者の結合が現存する文獻に初めて確認されるのが初唐の『藝文類聚』にまで下ることは前述したが、任昉より庾信に至る状態は、正しくこうした中間段階と符合するものである。

そして第三に、この詩は決して傳統樂府「梁甫吟」ではなく、あくまでも徒詩系作品にとどまること。すなわち「諸葛亮好爲梁甫吟」説話は、この時點ではまだ傳統樂府「梁甫吟」の制作そのものに影響を及ぼすに至ってはいないのである。

任昉詩は、上記の三點に整理した如く、詩歌の世界に「諸葛亮好爲梁甫吟」説話が導入・定着される過程の最初期にあって、その先驅性と限界性とを併せもつ象徴的な位置を占め

るものであった。

ではこの任昉に續く陸瓊と庾信とにおいて、諸葛亮は、「梁甫吟」と如何なる關係をとって立ち現れるのだろうか。

### 梁甫吟

陳・陸瓊

臨淄佳麗地

臨淄 佳麗の地

年少習名唱

年少 名唱を習う

似笑脣朱動

笑うに似て 脣朱動くもべに

非愁眉翠揚

愁に非ざるも眉翠揚まゆすゐあがる

掩抑隨竿轉

掩抑 竿ふえに隨いて轉じ

和柔會瑟張

和柔 瑟ことに會いて張る

輕扇屢迴指

輕扇 屢しばしばば指を迴らし

飛塵亟繞梁

飛塵 亟しばしばば梁を繞る

寄言諸葛相

言を寄す 諸葛相

此曲作難忘

此の曲 作りて忘れ難し

この作品については、二點の特徴を指摘すればよいだろう。第一に、傳統樂府「梁甫吟」としては初めて、諸葛亮との特別な關係を念頭において制作された作品であること。念のため繰り返せば、兩者の關係に初めて言及した任昉詩は、

李白「梁甫吟」考(上) (松原)

傳統樂府「梁甫吟」とは一線を畫して、「落日泛舟東溪」と題される徒詩であった。

第二に、陸瓊詩はなるほど諸葛亮說話を前提とするものではあるが、しかし說話内容の忠實な反映という點では、かえって任昉詩よりも後退をきたしていること。つまり要するにこの詩は、酒宴を詠じた作品なのであり、諸葛亮說話が内包する懷才不遇の重い慨嘆とは無縁のものなのである。ではなぜ「梁甫吟」と命題されたかとなれば、それは第一句「臨淄佳麗地」において梁甫山と程遠からぬ山東の臨淄を詠み込んでいるという地域性に由來するものに相違ない。そして「梁甫吟」を言挙げしたついでに、說話からの連想を借りて、諸葛亮の名を引き合いに出したにすぎないのである。それゆえこの詩が、懷才不遇の思いを主題に据える後の李白の「梁甫吟」とは何の脈絡ももたない異質の作品であることは、瞭然である(また人生短促を主題とする陸機および沈約の「梁甫吟」とも明らかに異質である)。

こうして陸瓊の詩は、傳統樂府「梁甫吟」における諸葛亮說話の定着という觀點で、先行の任昉詩に對して一進一退とも言うべき、不徹底な性格の作品となっているのである。

では次に、庾信を瞥見しよう。

## 中國詩文論叢 第十六集

臥疾窮愁

北周・庾信

危慮風霜積

危慮 風霜に積たまるり

窮愁歲月侵

窮愁 歲月に侵かさる

畱蛇常疾首

蛇を畱とどめて常に首を疾かみ

映弩屢驚心

弩を映うつして屢しばしばは心を驚おどかす

稚川求藥錄

稚川（葛洪）には藥錄を求め

君平問卜林

君平（嚴君平）には卜林を問う

野老時相訪

野老 時に相訪あひまね

山僧或見尋

山僧 或いは尋ねらる

有菊釀無酒

菊有るも釀かって酒無く

無弦則有琴

弦無ければ則ち琴有り

詎知長抱膝

詎ぞ知らん 長ながしく膝を抱かかいて

獨爲梁父吟

獨り梁父吟を爲なさんとは

この詩については、これが傳統樂府「梁甫吟」ならぬ、徒詩系作品であること以外に、あわせて諸葛亮說話の、自己の境遇への巧みな引き付け——また說話自體を基準にしてみれば非本來的な趣旨への變更——をも指摘しておきたい。

この詩の主題は、詩題にも明記されるように、病臥の愁い

を述べることにある。そして「有菊釀無酒、無弦則有琴」の二句に暗示されているのは、二者の圓滿兩立が損われていること、すなわち恵まれた社會的地位（官職）にありながら、病臥のゆえに、そのすぐれた境遇を滿喫できないことに對する贅澤な嘆きなのである。

ところでこの嘆きを述べる二句を承けるところで、諸葛亮說話が持ち込まれる。「詎知長抱膝、獨爲梁父吟——どうして豫想したのであるうか、久しく退居を餘儀なくされて、こうして梁父吟ばかりを爲うことになろうとは」。ここに用いられた「抱膝」とは、『三國志』「諸葛亮傳」に「躬耕隴畝、好爲梁父吟」と記す、その箇所につけられた裴松之の注が『魏畧』を引用する中で「（諸葛亮）每晨夜從容、常抱膝長嘯」として現れる語であり、庾信の博學は、當然この文脈を承知していたであらう。そして「抱膝」の語は、世に出て活躍することもかなわず、退居沈思する意味に用いられるものである。——しかし庾信の病臥のゆえの「抱膝」は、隴畝の中に退居していつの日か臥龍雄躍の機會を待つ諸葛亮の「抱膝」と、畢竟、似て非なるものであるとしなければならぬ。こうして庾信詩は、梁甫吟をめぐる諸葛亮說話を巧みに活用した作品となっているのだが、しかし反面、說話が本來蓄えて

いる赴々しい慷慨の氣迫をも失っているのである。

總じて魏晉南北朝も後期になると、「諸葛亮好爲梁甫吟」

説話は「諸葛亮傳」という史書の枠を抜け出て、詩歌の世界にも影響を与えつつあった。しかしこの説話が、懷才不遇を説く説話へと完成されるためには、「諸葛亮傳」には本來備わってはいなかったもう一つの要素——諸葛亮と歌辭「歩出齊城門」との結合——が必要であった。そしてかかる條件を満たした説話の完成時期は、おそらくは南北朝末期以降、また遅くとも『藝文類聚』の成書（六二四）以前にあった、と推測されるのである。

しかもこうして完成された説話が、李白という天才を得て、他ならぬ當の傳統樂府「梁甫吟」の中に全きまでに描き盡くされるまでには、なおも長い一世紀余りの時間を経なければならなかった。

# 〈注〉

(1) ここで『陳武別傳』の記事が引用されるのは、樂府題「梁甫吟」の由來が古いことを證するためである。例えば「行路難」の解題（『樂府詩集』七〇）にもこれとほぼ同様の記事

李白「梁甫吟」考（上）（松原）

を引用したうえで、郭茂倩は「則（行路難）所起亦遠矣」と按語を付しているからである。因みに陳武は、五胡十六國時代の胡人である。

(2) ④の『琴説』と⑤の『琴操』に述べられた曾子制作説については、郭茂倩はただ紹介しただけで、特別の重視をしていない。

(3) 『琴頌』引用の意圖は不明。「周公越裳」とは、周公攝政の時期、南海の越裳國からはるばると瑞鳥白雉が獻上されたことを言う。

(4) 梁甫山は、泰山の支峯の一つであり、古くは泰山が天を祭る封の對象であり、梁甫山は地を祭る禪の對象であった。『史記』「始皇帝紀」に「二十八年、禪梁父」。しかし歴代の梁甫吟歌辭を見る限り、こうした「禪の對象としての梁甫山」の意味あいには、その中に全く反映されていない。

(5) 但し今日でも、この郭茂倩説（また後述する『藝文類聚』説）を支持する立場もある。例：蕭滌非『漢魏六朝樂府文學史』一一一頁。

(6) 正確を期せば、これを現存最古の歌辭と認定する根據は、實は無い。この歌辭が文獻に初出するのは、おくらて唐初の『藝文類聚』一九まで下る。

(7) 『晏子春秋』の當該部分の原文は、左の通り。  
公孫接・田開疆・古冶子事景公、以勇力搏虎聞。晏子過而趨、三子者不起。晏子入見公曰「臣聞、明君之蓄勇力之士



## 中國詩文論叢 第十六集

也、上有君臣之義、下有長率之倫。內可以禁暴、外可以威敵。上利其功、下服其勇。故尊其位、重其祿。今君之蓄勇力之士也、上無君臣之義、下無長率之倫。內不以禁暴、外不可威敵。此危國之器也。不若去之。」公曰、「三子者、搏之、恐不得。刺之、恐不中也。」曰、「此皆力攻勸敵之人也。無長幼之禮。」因請公、使人少餽之二桃、曰、「三子、何不計功而食桃。」公孫接仰天而歎曰「晏子、智人也。夫使公之計吾功者、不受桃、是無勇也。士衆而桃寡。何不計功而食桃矣。接一搏鬚、而再搏乳虎。若接之功、可以食桃、而無與人同矣。」援桃而起。田開疆曰、「吾仗兵而卻三軍者再。若開疆之功、亦可以食桃、而無與人同矣。」援桃而起。古冶子曰、「吾嘗從君濟於河。鼉銜左驂以入砥柱之流。當是時也、治少不能游。潛行逆流百步、順流九里、得鼉而殺之。左操驂尾、右挈鼉頭、鶴躍而出。津人皆曰、河伯也。若治視之、則大鼉之首。若治之功、亦可以食桃、而無與人同矣。二子何不反桃。」抽劍而起。公孫接・田開疆曰、「吾勇不子若、功不子逮。取桃不讓、是貪也。然而不死、無勇也。」皆反其桃、挈領而死。古冶子曰「二子死之、治獨生之不仁。恥人以言、而夸其聲、不義。恨乎所行不死、無勇。雖然二子同桃而節。治專其桃而宜。」亦反其桃、挈領而死。使者復曰、「已死矣。」公斂之以服、葬之以土禮焉。

(8) この「爲」字は、新しく歌辭を爲るとも、既成の歌辭を爲

うとも、兩様に解釋できる。

(9) 一つの解釋として、陳壽はその歌辭を知りながら、あえて簡潔を重んじて省畧した可能性を考へることもできる。しかし劉宋になつて裴松之が『三國志』に注を付したときにも、その歌辭を補っていない。ちなみに裴松之注は、陳壽が省畧した異聞・逸聞を廣く收めるといふ特徴で知られている。

(10) 北宋期の『三國志』も、この點では現行本と同様であつた。その證據として、例えば「黃山谷曰、陳壽敘武侯躬耕隴畝、好爲梁甫吟、語勢既不盡其意。謂、文失載此詩、此蓋好簡之過。」(朱乾『樂府正義』卷九「梁甫吟」の注より再引) 黃山谷によれば、陳壽は簡潔を重んずるあまり、「歩出齊城門、云云」の歌辭を省略したことになるが、いずれにせよ當時の『三國志』には、この歌辭が載せられていなかったことが判る。

(11) 松浦崇編『全三國詩索引』『全宋詩索引』『齊詩索引』『陳詩索引』『北魏詩索引』『北齊詩索引』『北周詩索引』『隋詩索引』を利用した。また編者の厚意によつて、未刊行の『梁詩索引』による用例検索の成果を本稿に加へることができた。